JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	カイニョを活用したツアーによる景観保全活動についての一考察
Author(s)	金岡，奈穂子；森重，昌之；敷田，麻実
Citation	日本観光研究学会全国大会研究発表論文集，18：29-32
Issue Date	2003-11
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16803
Rights	本著作物は日本観光研究学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Institute of Tourism Research. Copyright (C) 2003 日本観光研究学会. 金岡 奈穂子，森重昌之，敷田麻実，第18回日本観光研究学会全国大会研究発表論文集，2003，pp.29-32.
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

日本観光研究学会全国大会 研究発表論文集No.18 (2003年11月) pp.29－32.
Proceedings for JITR Annual Conference, 2003. All rights reserved.
Printed in Japan. Copy right 2003 Japan Institute of Tourism Research

カイニョを活用したツアーによる景観保全活動についての一考察

The Role of Rural Cultural Tourism in Landscape Conservation : A Case of Dispersed Settlement in Tonami Plain

金岡 奈穂子* 森重 昌之* 敷田 麻実**
KANAOKA Nahoko, MORISHIGE Masayuki, SHIKIDA Asami

富山県砺波市は全国一の散居景観を誇る地域として知られているが、生活様式の変化による屋敷林(カイニョ)の減少や都市化の進行などにより、その景観が失われつつある。そこで本研究では、カイニョを活用した体験ツアーが、地域住民と観光客の交流を通じて、散居景観やそれらを培ってきた歴史・文化の価値を再認識する機会を創出できることを示した。そして、散居景観の保全のためには、散居村に関する知識の蓄積や伝統・文化の継承のみならず、現代生活に適応したカイニョの活用方策などの検討が必要であることを指摘した。

キーワード：景観保全、体験ツアー、散居景観、屋敷林(カイニョ)

1．はじめに

富山県砺波平野は、伝統的な散居景観が広がる地域として知られている。全国では、北海道の十勝平野、静岡県の大井川扇状地、島根県の斐川平野などにも散居景観が見られるが、砺波平野に広がる散居村地帯はその形態が典型的であり、面積が約 220km^2、散居民家約 7,000 戸を数え、全国一の規模を誇っている。しかし、砺波平野においても生活様式の変化、散居景観を構成する屋敷林(カイニョ)の維持にかかる負担の増加などにより、その景観が失われつつある。

近年、地域住民が地域資源を知る機会や地域外住民に地域を評価してもらう機会をつくり出す試みが各地で見られるが、このような取り組みによって景観保全への関心を高めることができると考えられる。そこで本研究では、景観保全の１つの手段として、カイニョを活用した体験ツアーを実施し、その効果や有効性を明らかにした。また、体験ツアーを継続することを通じて、散居景観の構成要素である生活文化や歴史、伝統などを継承し、それによっても景観が保全される可能性を示した。

2．カイニョの役割と保全に向けた動き

(1) 富山県砺波市の概要

砺波平野の中心に位置するある富山県砺波市は、富山県の西南に位置しており、庄川からなる扇状地の扇央部に位置する。平成 12 年の人口は 40,744 人、世帯数は 11,421 世帯である。平成２年と比較すると、人口で約 10%、世帯数で約 20%増加しているが、核家族化が進んでいる。また、昼間人口は約 5%減少しており、隣接の高岡市を核とするベッドタウン化が進行していることがわかる。

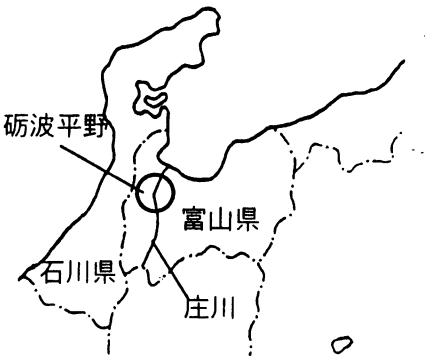

図-1 砺波平野の位置

(2) カイニョの役割

砺波平野に広がる散居村の起源は、洪水を避けるために高い場所に家を建て、その周囲を開いて耕作するようになったことからできあがってきたといわれている [1]。このような散居形態は、開拓が急速に進む中世末から近世初頭にかけてできあがった。そして、散居を構成する要素である伝統的家屋を取り巻く屋敷林を、砺波地方では「カイニョ」と呼んでいる。その起源につ

* 株式会社計画情報研究所 ** 金沢工業大学環境システム工学科

いては定かではなく、開拓時に原生林の一部を残したものとも、防風林や日よけとして植えたとも言われている[2]。カイニョはスギ、ケヤキなどを中心とした高木層、ツバキ・アオキなどの中低木層の木々で構成されている。防風、日よけという役割のほか、かつてはスンバ(スギの落ち葉や小枝)を燃料とし、その材を建築用材としても利用してきた。また栗や柿、梅を植え、花を鑑賞し、果実は食料や副収入となった。女の子が生まれると桐の木を植え、嫁入りに備えた。「高(土地)を売ってもカイニョは売るな」とも言われ、先祖代々大切に守り育てられてきた[3]。

しかし、昭和30年代中頃から40年代頃にかけて、燃料が石油やガスに代わり、改築した家の窓枠にはアルミサッシが使われるなどといった生活様式の変化によって、カイニョの役割に変化が見られるようになった。加えて、落ち葉の処理に労力と維持費がかかることや核家族化、都市化、ベッドタウン化などの影響も受け、カイニョの維持が難しくなりつつある。

(3) カイニョの保全に向けた動き

平成11年に富山県が行った一般住民(N=1,308)を対象とした質問票調査では、散居景観を後世に残す必要性について、64.7%が「必要である」と答えている。その理由として、「砺波平野の特徴的な希少性のある景観だから」が66.1%、「自然環境として価値があるから」が50.2%、「人間と自然が共存する時代の手本となる生活様式だから」が39.0%あげられた(複数回答)。

これまでの燃料や建築用材としての役割を終えたカイニョではあるが、地域の個性、自然環境としての価値、循環型社会の手本など、新しい価値や意味づけが望まれていることがわかる。また、他の地域から砺波平野を訪れる人が増えることについては、46.6%が「増えた方がよい」と考えている。その影響としては、「地域に活気を与える」と考えている人が49.8%、「散居村や屋敷林への理解が深まる」と考えている人が38.1%であった(複数回答)。

一方、カイニョに囲まれた伝統的家屋に住む人(N=1,133)を対象とした質問票調査(平成12年実施)では、現在の砺波平野の景観に対する考え方は、「砺波平野の景観は住民だけでなく地域全体のもの」が36.1%、「散居の景観は守っていく価値のあるもの」が23.1%、「砺波平野の美しい散居景観に誇りを感じる」が23.1%であった。これらのことから、散居村の景観を地域の共有の財産として捉えていることがわかる。

このような住民意識を背景に、富山県と砺波平野に位置する市町村では、平成14年から「散居景観保全事業」により、地域住民による散居景観の保全やカイニョの維持管理について協定が結ばれた地区に対して支援を行っている。しかし、費用負担は枝打ちなどにかかるものだけであり、木を植えるためなどの補助ではないという点、また補助対象を景観としているが、背景にある人材の育成、生活文化や歴史、伝統などの維持・活用と絡めた内容になっていないという問題がある。

また民間レベルでは、平成9年から「砺波カイニョ倶楽部」が発足し、カイニョのある家の住まい方見学会、スンバ掃除、勉強会の開催、知事との意見交換会、会報の発行などの活動を継続的に行っている。「砺波カイニョ倶楽部」は会員がカイニョの価値を再認識し、楽しむ場になっている。しかし、会員全員がボランティアであり、会員以外がカイニョへの理解を深めるための情報発信や、景観保全のための積極的な活動の実施が難しいという問題がある。

3．景観保全に向けた体験ツアーの実施

散居村やカイニョを取り巻く環境が変化する中で、カイニョの保全に関わる有志によって、体験ツアーを実施することとした。その目的として、まずカイニョのない家の住民に、散居景観が住民共有の財産であるという認識を深める契機をつくり出すことがあげられる。第2に、カイニョを持つ住民に対し、地域外住民から評価されることにより、そこに住まうことに誇りを感じる契機となる点がある。さらに、散居景観やカイニョに対する地域内外の理解を深め、保全の意識を高め、保全に関する知恵を得る機会をつくり出すという目的もある。

体験ツアーは、平成14年5月4〜5日、平成15年5月3〜4日の連休に1泊2日で行った。いずれも、県外から約10名、県内から約20名の参加者があり(表-1)、20歳代の参加者が半分以上を占めた。参加者は、応募チラシを作成し、口コミや砺波市のホームページへの掲載などを通じて募集した。なお、平成14年と平成15年のどちらも参加したのは、1名であった。

また体験プログラムは、表-2に示すように、砺波の

歴史、文化、産業を感じられるような内容にするとともに、民泊により散居景観を形成するカイニョのある暮らしを体験できる内容とした。

表-1　体験ツアー参加者の居住地

参加者の居住地	平成14年	平成15年
東京都	4	3
大阪府	2	-
京都府	1	2
新潟県	2	-
長野県	1	2
山梨県	2	-
石川県	-	1
山口県	1	-
福岡県	-	2
富山県内	17	17
合　計	30	27

表-2　体験ツアープログラム(平成14年)

日	内　　容
1日目	砺波駅集合　自己紹介
	お昼を食べながら散居村の眺めを堪能（閑乗寺） ・カイニョレクチャー①
	合鴨農法確立者、荒田氏のお宅訪問 ・荒田氏のスライドをまじえてのレクチャー ・無添加手づくりお菓子を堪能
	民泊先へでスンバ掃除 ・カイニョレクチャー②
	越中庄川荘でお風呂
	「食の伝承人」田嶋氏の郷土料理で宴会
2日目	民泊先の家周辺散歩
	荒田氏のお米と味噌で朝ご飯
	チューリップ公園散策
	名越家の鍜絵（双龍）見学
	千光寺の鍜絵見学、鍜絵レクチャー
	梅原邦荘で昼食

特に、参加者に散居景観の美しさを見せて伝えるだけでなく、その維持の背景にあるスンバ掃除を体験メニューとして盛り込み、維持の負担を体験するプログラムを設定した。また、宴会に地域住民を招いたり、一度砺波平野を訪れただけでは会えないような人から話を聞いたり、普段見られないものを見せたりする機会を設けた。さらに、散居景観を共有の財産と認識してもらうために、なるべく多くの地域住民に事務局として協力・参加していただいた。地域住民の参加募集にあたっては、普段から景観保全やまちづくりなどに興味関心を持ち、景観保全のためのアイデアを持っている人を中心に声をかけた。

そして、体験ツアーの評価や効果などを把握するために、体験ツアー後に参加者にツアーの満足度を把握する質問票調査を行った。また、散居景観の保全に向けたアイデアも募集した。さらに、体験ツアーの数週間後に、電話での聞き取りによる追跡調査を行った。

4．考察

(1) 体験ツアーの成果

一般にツアーというと、受け入れ側と参加者あるいはホストとゲストの関係で語られる場合が多い。しかし実際には、受け入れ側となる地域は一様ではなく、散居村やカイニョに深い関わりを持つ者から、地域外の参加者に近い「よそ者」の立場までさまざまである。本研究では、受け入れ側、地域内の参加者、地域外の参加者それぞれに成果を得ることができた。

まず受け入れ側では、「地域資源であるカイニョや文化、人物を紹介できた」、「地域外の参加者や世代を超えた交流ができた」、「地域資源や人物を知るための学習機会ができた」といった成果が明らかになった。

また地域内の参加者からは、体験ツアーを通じて、普段暮らしていながら知ることのなかった地域資源や人物を再認識できた、身近なものが地域外の参加者にとっては資源に感じられる、今後も学習や交流を続けていきたいといった意見が聞かれた。

さらに体験ツアー後の質問票調査の結果から、地域外の参加者は「美しい散居景観やカイニョを目にしたことに感動した」との回答が最も多かった。また、「カイニョ倶楽部の代表幹事による農業やカイニョに関する話がおもしろく、地域住民と交流できた点がよかった」、「『食の伝承人』として富山県が指定している人物による郷土料理がよかった」という評価が得られた。また、参加者への電話による追跡調査から、東京や京都からの参加者が友人にカイニョを宣伝したという報告があり、参加者のカイニョに対する関心が高まったことも確認できた。

一方、参加者から景観保全のための提案がいくつか得られたが、中でも地域外の参加者による「カイニョサポーター」の組織化や、総合学習と体験ツアー、景観保全活動の連携の推進といったアイデアは今後検討すべき項目である。

(2) 体験ツアーの課題

体験ツアーによってさまざまな成果が得られたが、同時に参加者からいくつかの課題も指摘された。例えば、カイニョや農業などに関する体験型プログラム、多様なニーズに対応できる時間的ゆとりとオプショナルツアー、個人旅行や体験ツアー独自の特別な体験プログラムの必要性があげられた。

今後体験ツアーを継続するためには、以下の課題を克服する必要がある。第1に、多様なニーズに対応する地域資源のデータベース化を進める必要がある。そのためには、受け入れ側自身が地域を学習し、地域資源や人材を発掘し、その活用方法を検討する機会をつくる必要がある。その過程でさまざまな住民が参加し、地域資源を共有し、それらをつなげることによって、質の高い体験メニューが実現できると考えられる。

第2に、多様な体験メニューと観光客のニーズをうまくコーディネートする機能が必要である。これにより、ツアーの日程や人数、年代などによって違うニーズを見極め、観光客のニーズを満たしながら、地域の魅力を発信できると考えられる。

第3は、今回の体験ツアーの参加者から、農業やカイニョを紹介した人の話がおもしろかったという意見があったことからもわかるように、ツアーの参加者の満足度は、受け入れ側の資質によるところが大きい。地域への愛着が強く、知識と経験が豊富で話し上手な人材の育成が必要である。

5．おわりに

本研究では、散居景観の保全に向けた1つの手段として、カイニョを活用した体験ツアーを実施した。受け入れ側では地域資源の再認識の機会が得られた、参加者からの評価によって自分たちの住まい方に誇りを持つことができた、景観保全に向けた知識を取り入れることができたという成果、参加者では散居景観やカイニョに対する関心を高められたという評価が得られた。また、受け入れ側の地域の中には、ホストに近い立場の地域住民と「よそ者」の立場に近い地域住民が存在し、体験ツアーは両者に効果をもたらしていることを明らかにできた。

ところで、砺波平野の散居景観やカイニョは、それらを取り巻く砺波の農業、歴史、生活文化、誇り、人材(人財)などによって保全されてきた。その意味で、散居村やカイニョはこれらを具現化した1つのシンボルと捉えることができる。体験ツアーを継続することによって、景観を支えてきた要素を発掘し、それらを活用する機会を増やすとともに、新しい意味や価値を加えることができると考えられる。

しかし、このような体験ツアーを継続することだけで、散居景観を維持することは難しい。なぜなら前述したように、カイニョが現代のライフスタイルに合わなくなったからである。そこで、スンバの活用を目的としたペレット化やスンバペレットストーブの技術的な研究、現代の家族形態にあった伝統的家屋の改築方法の研究などが求められる。また、これまでの良さである資源循環型のカイニョでの生活と、新しい伝統的家屋の住まい方のモデルを提示し、特に若者が住みたいと思うライフスタイルの提案も必要である。

近年、伝統的な景観や里山保全に向けたさまざまな活動が行われているが、その中には過去を見直す機会だけに着目している例も少なくない。しかし、過去を評価する作業と同時に、現代と未来に合った新しいライフスタイルを提案するという両輪が揃って、初めて景観保全が行われるのではないか。

その時の体験ツアーは、地域資源の再評価や活用方法の検討という過去を評価する役割を担うことになろう。もちろん、過去を見直す方法は体験ツアーに限らないが、ツアーには地域住民に「よそ者」の視点を与える可能性があるのではないか。ツアーにはそもそも非日常空間を体験する要素があり、普段の生活や景観などを「よそ者」の視点で捉えることができるほか、宿に泊まることによって、その日に得た知識を再編する時間が与えられる。その意味で、体験ツアーは単に地域外の参加者から知識を得るだけでなく、受け入れ側が知識を再編するプロセスも内包しているといえる。

【参考文献】

1) 田園空間整備事業となみ野地区推進協議会(2003)：砺波平野の屋敷林を学ぶ, p.4
2) 田園空間整備事業となみ野地区推進協議会(2003)：屋敷林維持管理の手引き, p.1
3) http://www.city.tonami.toyama.jp/gaiyo/sankyo/sankyo.html (2003.11.03)